
頑張れフェレット

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れフェレット

【Nコード】

N1389I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

フェレットのブライアントとトレーパーは家の中に侵入してきていた不貞の輩を成敗せんとしていた。ところがそのせいで。動物を主人公にしたコメディです。

第一章

頑張れフェレット

「では行つて来ます」

「それじゃあね」

西森桜と西森洋介は共働きの夫婦である。毎朝一緒に仕事に出る。そしてその時に家の中にいる彼等に挨拶をするのを忘れたことはない。

彼等とはフェレットのことだ。フェレットは二匹いて銀色の毛のフェレットをブライアント、金色の毛のフェレットをトレーパーという。共に同じ歳で一緒に飼った。

まだ子供のいない二人にとってはまさに子供のような存在だ。いつも可愛がっている。その彼等に出掛ける時に挨拶をするのが日課なのである。

「いってらっしゃい」

「気をつけてね」

ブライアントとトレーパーも彼等に挨拶をする。しかしフェレットの言葉なので彼等にはわからない。スーツ姿の夫に対して桜はドアのところで言っていた。

「あの、洋介さん」

「どうしたの？桜ちゃん」

茶色の髪の毛の前のところをさりと右手の指で払いながら妻に答える。涼しげな顔の美男子だ。職業は高校の国語の先生だ。

桜は英語の先生だ。目はアーモンド型でやや吊り上っている。口は少し尖っている感じがだが適度な大きさにこりとした感じだ。黒い髪を長く伸ばしていて前髪を右から左に流している。とにかくその黒い髪をかなり伸ばしているのが目立っていた。

その二人が扉を閉めようとしたところで話をはじめたのだ。

「二匹の餌ですけれど」

「もうあるじゃない」

こう妻に返した。

「この前の日曜に買ってるよ、とつくに」

「それとは別にです」

桜は真面目な声で夫に返した。

「御馳走を買ってあげたいのですが」

「御馳走を？」

「はい」

こう夫に述べるのだった。

「スーパードとでもいいフェレットの御飯を見つけましたので」

「じゃあ今晚は彼等にそれをあげるんだね」

「そのつもりです。駄目でしょうか」

「いいと思うよ」

にこりと優しい感じで妻に笑って答えるのだった。

「それでね。いいんじゃないかな」

「そうですか」

夫のその言葉を聞いて笑顔になる遙だった。

「それなら今日は」

「そうだね。ブライアントもトレーパーも御馳走だよ」

「そうですね。ではブライアント、トレーパー」

丁寧な感じで二匹にも顔を向ける。

「今日は楽しみにしておいて下さいね」

「それまで留守番頼むよ」

洋介も彼等に声をかけた。

「じゃあ。そういうことだね」

「行って来ます」

こうして二人は家を後にした。扉の鍵が閉められる音が聞こえてから。ブライアントとトレーパーはお互いの顔を見合わせて言い合うのだった。

「聞いたな、兄弟」

「ああ、聞いたよ」

すぐにこう言い合うのだった。

「今晚は御馳走らしいな」

「御馳走？何だろうな」

トレーパーは相方の言葉にまずは笑みになる。あまりにも笑うので口の中の牙が見えてさえいる。そしてそれはブライアントと同じであった。

「鶏かな？それとも魚かな」

「僕達何でも食べられるけれどな」

「けれど何だろうな」

実はこの二匹には好き嫌いはなかったりする。その分飼いやすくはある。

「それが問題だけれどな」

「まあ何はともあれ」

トレーパーは言うのだった。

「今晚は楽しみだな」

「ああ、そうだな」

そしてブライアントも頷く。

「御主人達が帰ったその時がな」

「待ち遠しいな」

そんなことを言いながらとりあえず居間に戻った。そうして日課の睡眠に入ろうとしていた。

ところがだ。ここで白い絨毯の床の上に。あるものを見つけたのだった。

「おい兄弟」

「どうしたよ」

「あれ見ろ、あれ」

まずはトレーパーがブライアントに言ってきた。

第二章

「あれ蜘蛛だよな」

「ああ、蜘蛛だな」

ブライアントも真面目な顔で相棒の言葉に頷く。

「あれはな」

「そうだよな。どうする？」

トレーパーは今度は尋ねてきた。

「蜘蛛。どうするんだ？」

「どうするってそりゃ兄弟」

ブライアントはそんなの決まってるだろう、と言わんばかりの調子だった。

「やっつけるに決まってるだろうがよ」

「やっつけるか」

「そうだろ？ あいつは侵入者だ」

彼等にとってはこの家は自分達の城だ。だからそうなるのだ。

「それをやっつけないでどうするんだよ」

「そうだな」

そしてトレーパーも彼の言葉に頷いた。

「じゃあここは」

「僕は右から行くぜ」

ブライアントは相棒にまた言った。

「だからそっちはな」

「右からか」

「だから違うって」

すぐに相棒のボケに突っ込みを返した。

「左からだよ、この場合」

「僕は左からかい？」

「僕が右から行くんだよ」

こう少し怒った感じでトレーパーに言う。

「じゃあ君は左じゃないか」

「ああ、そういえばそうか」

「そうだよ」

このことをここで確かめ合うのだった。

居間は彼等にとってはかなり広い。テーブルが中央にありテレビや棚が端にそれぞれ置かれている。そうして彼等は今そのテレビの前のところにいて蜘蛛を見ているのだった。

蜘蛛はそのテーブルの下を動いている。そのまま玄関の方に向かうとする。ブライアントはその蜘蛛を警戒するように見ながらまたトレーパーに声をかけた。

「それで兄弟」

「僕が左だよね」

「やっとわかってくれたね」

彼の言葉を聞いてまずは微笑むブライアントだった。

「そうだよ、僕は右から君は左から」

「あの蜘蛛を挟み撃ちにね」

「侵入者は何があっても許さない」

ブライアントの言葉が強いものになった。

「だからね」

「よし、それじゃあ」

トレーパーもここでやっと動きだした。そうして左右からそれぞれ蜘蛛を狙いジリジリと動きだした。そのまま蜘蛛を狙おうとするが。

「あれっ!？」

「いなくなった!？」

蜘蛛が急に消えたのだ。彼等の前で煙の様に消えてしまった。彼等はそれまで蜘蛛がいた場所を見てまずは動きを止めてしまった。

「いない!？」

「いないよね」

トレーパーはブライアントの言葉に応えた。

「何処にもいないよね」

「消えたのかな。まさか」

「そうじゃないかな」

トレーパーはぼんやりとした調子で相棒に答えた。

「やっぱり。僕達のことを察して」

「ちえっ、勘がいいなあ」

ブライアントは相棒の言葉を聞いて苦い顔になった。

「僕達のことを気付いたなんて」

「それで何処に行ったのかな」

トレーパーの言葉は続く。

「あの蜘蛛。何処かな」

「消えた筈がないよ」

ブライアントは言った。

「絶対にね。消えるなんてことはないよ」

「それはそうだね」

トレーパーもブライアントのその言葉に頷いた。

「じゃあとりあえず探す？」

「そうしないとね。絶対にまだいる筈だから」

ブライアントはまた言うのだった。

「この部屋に」

「じゃあ探そうか」

「うん、それじゃあ兄弟」

トレーパーの言葉に頷きながら周りを見回しそうしてまた彼に話した。

第三章

「まずはね。僕が右で」

「君右好きだね」

「別にいいじゃない。それで君が左」

それぞれ分けるというのだ。

「それでいいよね。分かれて見ようよ」

「僕が部屋の左側で君が右側」

トレーパーは相棒の言葉を聞いて述べた。

「それで探すんだね」

「その通りだよ。じゃあ探そうか」

「うん、それじゃあね」

こうして彼等は蜘蛛を探しはじめた。そうしてそのうえで居間のあちこちにあるものの中を見たり探し回ったりするのだった。

テーブルの上が上がってそこに置かれたままだったコップをひっくり返す。それでまだなかに残っていたコーヒーが零れて絨毯にまで滴り落ちる。

ティッシュを口で引っ張り次から次に出す。ティッシュが床に散乱する。

そしてテレビのリモコンのスイッチを押す。するとテレビがついたが彼等はその音に驚いてまた騒ぐことになってしまったのだった。

「ひゃっ、テレビが!？」

「勝手についたよ。これどういうこと!？」

「いや、わからないよ」

ブライアントもそれがどうしてなのか全くわからなかった。

「これって一体何なのかな」

「お化けがいるとか？」

トレーパーはこう考えたのだった。

「まさか」

「お化けって？」

「いや、あの蜘蛛かも」

しかしすぐにこうも考えるのだった。

「蜘蛛がやったんだよ、絶対に」

「あの蜘蛛がだよね」

「そうだよ。あいつ一体何処に行ったんだ？」

勿論蜘蛛がそんなことは絶対にできないということがわかっていない彼等はここでいぶかしむ顔になってまた話をするのだった。

「一体何処に行ったんだ？本当に」

「もっと探そう」

トレーパーの提案はこれだった。

「もっとね。部屋の中をね」

「そうだね。それしかないよね」

「うん、それしかないよ」

ブライアントに対してあらためて言うのだった。

「こうなったら許せないよ、テレビで僕達を驚かせるなんて」

「全く。じゃあ今度は」

「何処を探すの？」

「棚の上やテレビの上を探そう」

ブライアントの今度の提案はこれであった。

「もうこうなったら徹底的にやらないとね」

「そうだね」

トレーパーも彼の言葉にはっきりと頷くのだった。

「こうなったらね。売られた喧嘩だし」

「侵入者の癖に生意気なんだよ」

ブライアントは完全に怒っていた。

「こうなった何としても探し出して」

「やっつけよう」

「うん」

こう言い合い本当にテレビや棚の上に上がってそのうえで蜘蛛を

探し回る。そこで洋介と桜がいつしよに映っている写真を下に落としたり棚の上にあった小道具を落したり壊したり割ったりしていく。その破片が次々と絨毯の上に落ちたり棚の上を汚していくのだった。

しかしそれでもだった。蜘蛛はいない。何処にも見つからないのだった。

「いた？」

「ううん」

トレーパーの言葉に首を横に振るブライアントだった。彼等はそれぞれ棚の上にいる。そすいて人形をひっくり返してその中を探りながら話をしていた。

「全然。やっぱりいないよ」

「そうなんだ、そこにもいないんだ」

彼等は蜘蛛がどうしても見つからずいよいよ困ってきた。

「まさか本当に消えたとか？」

「そんなことはないだろ」

流石にそれはないと彼等も思うのだった。

「やっぱりそれは」

「じゃあ一体何処に行ったんだろ」

ブライアントもトレーパーもわからなくなっていた。

「あの蜘蛛、本当に」

「この部屋の中にいる筈だけれど」

そう思ってまだ探し回る。そしてここで。不意にブライアントがテーブルの上を見て相棒に対してすぐに大きな声で言ってきたのだった。

第四章

「おい兄弟、あれ見ろよ」

「あれって!？」

「だからテーブルの上だよ」

そこを見るように言うのだった。

「あそこにいたぞ、あそこに」

「あつ、本当だ」

見ればその通りだった。蜘蛛がそこにいた。彼等の騒ぎをよそにテーブルの上を呑気に這っているのだった。その八本の足で。

「あそこにいたのか」

「一体今まで何処に？」

それは彼等にはわからないことだった。

「糞っ、しかしいるとわかったからには」

「ああ、兄弟」

トレーパーがブライアントに言ってきた。

「捕まえよう、いいな」

「勿論だ。それじゃあ」

こうして彼等はすぐに筆筒の上から飛び降りた。ここで無意識のうちにカーテンに爪をかけてしまい派手に切ってしまった。しかしそれは彼等の気付かないことだった。

「蜘蛛め、逃がさないぞ!」

「覚悟しろ!」

口々にこう言いながら蜘蛛に向かうのだった。

「今度こそ捕まえてやるからな」

「僕達を甘く見るなよ」

こんなことを言いながらテーブルに向かいそうして蜘蛛を捕まえようとする。しかし何とここで蜘蛛は上に上がってしまったのだった。

「えっ!？」

「嘘だろ!？」

しかし嘘ではなかった。蜘蛛はするすると自分の糸を使って上に上がっていく。そうして天井にぺたりと張り付いてしまったのだった。

「僕達を馬鹿にするのか!」

「それで逃げられると思っているのか!」

彼等は馬鹿にされたと見てこう抗議した。

「このままじゃ終わらないぞ!」

「見ている!」

そしてまた上に上がる。そうしてそこからジャンプして蜘蛛に襲い掛かろうとする。だがそれは天井から吊られている蛍光灯のボンネットに当たりそれを叩き落すだけだった。だが彼等はそれが落ちても無事だった。そうしてまた上に上がろうとするが蜘蛛はまた何処かに行ってしまった。

「今度は何処に行ったんだ!？」

「また消えたのか!？」

ブライアントもトレーパーも下に降りたうえで必死に周囲を見回す。

「おのれ、今度は逃がさないぞ」

「覚悟しろ、覚悟」

あれこれと探す。しかし今度は中々見つからなかった。そうして彼等で探し回っているうちに。部屋の扉が開いたのだった。

「まずは御飯をあげてですね」

「そうだね」

桜と洋介の声だった。

「それから僕達の晩御飯にしようか」

「はい、そうしましょう」

そんな話をしていた。この時まで彼等は普通の日常の中にあっただが居間の中を見た途端に。その表情を見る見るうちに一変させた

のであった。

「な、何ですかこれは！」

「地震があったのかい！？」

桜も洋介もその居間の有様を見て思わず叫んだ。何もかもが壊されて荒れ果てていてどうしようもない有様になってしまっていたからだ。

「空き巣が入ったとか！？」

「それもあるよね」

「あつ、御主人達だよ」

「帰られたんだね」

ブライアントとトレーパーは二人を見てまずは顔を見合わせたのだった。

第五章

「そういえば晩御飯はね」

「御馳走だったよね」

「あっ、このカーテン！」

「間違いないね」

しかし能天気な彼等とは裏腹に二人は部屋の中を調べていた。そうしてカーテンが引き裂かれているのを見て何が起こったのかを悟ったのだった。

「貴方達！」

「何てことしたんだい！」

「あれっ、僕達？」

「みたいだよね」

ここで自分達に声かけられたことはわかるのだった。

「どうやらね」

「何でかな」

「そこに座りなさい！」

「だめじゃないか、こんなことをしたら！」

ここから彼等は二人に延々と御説教を受けた。彼等はそれを座って聞くだけだった。しかしであった。彼等はそれを慚然として聞いていた。それが終わると。

「今度こんなことしたら許しませんよ！」

「お仕置きとして御馳走は明日。いいね」

「えっ、御馳走はなしかよ！」

「いつもの御飯かよ！」

彼等は抗議するがこれは聞き入れられなかった。こうして彼等はあえなく普通の晩御飯となった。

「ちえっ、何でだよ」

「なあ」

彼等はその御飯を食べながらぶつくさと不平を漏らしている。その間にも桜と洋介は部屋の中をせっせっせと掃除して元に戻っていた。

「僕達怒られるようなことしてないのに」

「むしろあれだよね」

トレーパーがブライアントに言う。彼等は今皿の上のフェレットの餌を食べていた。彼等が普段から食べているそのフ通の御飯である。

「褒められるべきだよね」

「そうだよ」

ブライアントも言う。

「蜘蛛を捕まえようとしたのにね」

「侵入者をね」

彼等にとつてはあくまでそうなのだった。

「それで何だよ。こんなに怒られるなんて」

「おかしいよ」

彼等はこうぶつぶつと言っている。

「何でなのかな」

「道理に合わないってないよ」

「全く」

そんなことを言い合いながら御飯を食べていた。桜と洋介はそんな彼等を見てそのうえでふう、と溜息をついてそれから話をするのだった。

「何であんなことをしたんでしょう」

「わからないね、それはね」

二人にもわからないことなのだった。

「まあ彼等には彼等の考えがあっただらうけれど」

「おかげで私達は大変です」

桜はそんなことを言いながら部屋の掃除を続けていた。おかげでもう部屋はかなり奇麗になってきていた。二人共教師らしいスーツ

から私服に着替える間もなくだった。

「こんなことをしてくれて」

「まあ叱ったからそれでいいじゃない」

洋介はまだ言いたい妻に対して言った。

「もうね」

「いいですか」

「そうだよ。こう言ったら何だけれど動物がしたことじゃない」

「はい」

結局はこれで済むことだった。やはり彼等は動物なのだ。どんな理由があるとすれ悪意はない、それは二人もよくわかっていることだった。

「それでは」

「片付けたら夕食にしよう」

「はい、それじゃあ」

何だかんだでそんな彼等を許す桜だった。そうして後は何事もなく日常に戻った。その時にはもうブライアントもトレーパーもそれぞれ安らかに眠っていた。その日はとりわけ疲れたのでぐっすりと眠る彼等であった。

頑張れフェレット 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1389i/>

頑張れフェレット

2010年10月8日15時09分発行